

# 『 悲運の比企一族と 陰謀の北条一族を検証する 』

はじめに

会報第81号で「比企氏の乱」、82号で「北条政子と義時」について投稿させていただきました。

今回は両一族について、集大成として発表いたします。

来年のNHK大河ドラマでは北条義時を主人公として放映されるとのことです。

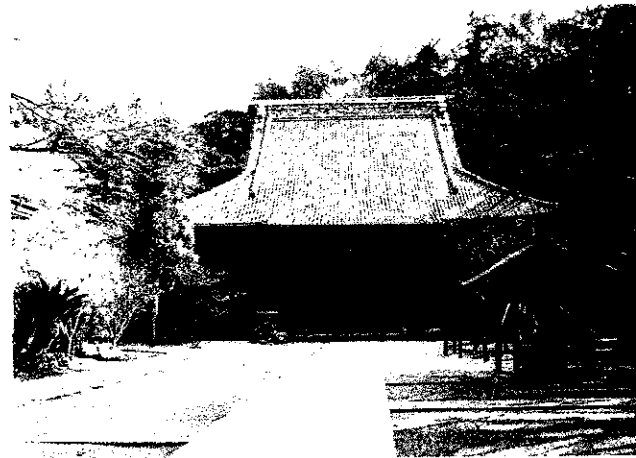
当方としては、鎌倉幕府で暗躍した悪人・義時を何故採り上げるのかと、多変不本意であり納得できませんが、最後に触れさせていただきます……。

## 1. 比企氏

### (1) 比企氏とは…。

比企氏の本拠地は武蔵国比企郡（現在の埼玉県比企郡と東松山市の一部）の郡司で、それ以前は神奈川県秦野市に住み着き、康和年間（1099～1104）、この比企郡に移り住み土着して比企氏を名乗ったとされている。

秦野市の頃は、波多野氏を名乗り、秦氏の出であろうとしているが、絹織物や製鉄の技術を持つ渡来系の氏族流れが比企氏であったということになる。



鎌倉の妙本寺（比企氏館跡）

平安時代後期の頃の当主は遠宗で、若くして京に上り、源頼朝の父・義朝に仕え、保元・平治の乱にも遭遇しており、平治の乱で、平清盛に義朝が敗死した。

嫡子の源頼朝は、清盛に前に突き出され、極刑とされるどころ、池禅尼（清盛の叔母）の懸命の嘆願にて、死一等を減ぜられ、伊豆の蛭ヶ小島に流罪となった。

比企遠宗は妻（禅尼・実名不詳）と共に、比企郡から伊豆まで、鎌倉幕府が開かれる迄の20年余（遠宗は直前死去）にわたり、生活の糧を送り届けていたのである。頼朝の乳母父として遇していた。ただし、女子三人だった為、甥の能員を迎えた。比企能員は御家人として源平合戦や奥州藤原氏討伐にも功績を上げ、北条氏を凌ぐ、御家人筆頭の地位を築いていったのである。

**検証** 比企氏は、鎌倉幕府開設から源頼朝に沿い、一般的には北条氏の名前がでているが北条氏を凌ぐ一族であった。

(2) 江戸時代、源頼朝の墓が建立された訳とは？



鎌倉に建立された源頼朝の墓

江戸時代後期の安永8年(1779)に、鎌倉の西御門に島津藩主・島津重豪が源頼朝の墓を建立した。

鎌倉幕府初代将軍の墓としては、やや規模や様相は貧弱であるが、建立の理由は、前述の比企遠宗に三人の娘の長女・丹後局が源頼朝との間に生まれたのが、島津忠久で、島津藩初代藩主であった。

島津藩は源氏の流れであるとの思いから、鎌倉に頼朝の墓を建立したものだ。ただし、お骨等はなく、いわゆる供養等である。

(3) 丹後局の碑が戸塚にあります。(写真と内容は別紙・2に掲載)

(4) 「比企氏の乱」は北条氏が政変を断行したもの。

鎌倉幕府初代将軍の源頼朝は正治元年(1199)1月13日、死去した。53歳であった。その後、長男頼家が18歳で第二代将軍に就任する。

実は頼家は、比企氏館で誕生しており、比企能員の妻が乳母であり、長じて、能員の娘・若狭局と結婚しており、長男・一幡も生まれたのである。

比企氏は初代将軍・頼朝の頃より、御家人として勢力があり、頼家の代になっても更に、伸長していったのである。

- ① 頼朝が死去して、4年後の建仁3年(1203)7月、将軍頼家病気で臥す。
- ② 同8月27日、『吾妻鏡』に次の通りの記述あり。

「将軍家の御不例、こと危急の間、御讓補の沙汰あり、関東三十八ヶ国の地頭職をもって、舍弟千幡君(後の実朝)に譲りてまつる。関東二十八ヶ国の地頭ならびに惣守護職をもって、御長子一幡君に充てられる。ここに外祖比企判官能員、ひそかに讓補する事を憤怒し、叛逆企て千幡君ならびに、外家己下を譲りたてまつらんと擬すと云々」

**検証** 頼家が病気とはいえ、領地の相続を長男の一幡に与えるのは当然ながら、弟の実朝にも与えるのは論理上、矛盾がある。これは実朝を要する北条時政の策謀である。

③ 比企氏滅亡の運命の一日 (『吾妻鏡』の記述を抜粋)

イ. …朝…

比企能員が婿である將軍頼家を訪ね、前記の相続について異議を唱え、北条時政を討伐との密談を行った。ただし、障子を隔てた処に居た北条政子がそれを聞き、名越の時政邸に使いを仕向けた。

**検証** これはどう考えても合点がいかない。頼家と政子は同居しておらず、これほどの大事な密談を障子を隔てた処にいる政子が聞こえる様なことは考えられない。そして、この日の夕方に比企氏を襲撃した北条氏や御家人一同の正当性を誇示するもの。この『吾妻鏡』の箇所は創作と思慮する。

ロ. …昼…

北条時政が薬師如来像の供養のため、比企能員に招待状を家臣に届けた。比企一族は、北条との風聞を考え、武具を持ち、家臣を従えさせる事を上申したが、能員は仏事であり、問題ないとし数名の家臣だけで、名越の北条時政邸に出向き、門の前で、仁田忠常・天野蓮景によって、能員の左右の手を取って、殺害したのである。

**検証** 鎌倉幕府の準公歴史書と言われ、北条氏よりの『吾妻鏡』であるが、実に悪辣な比企能員の暗殺である。

ハ. …夜…

北条政子の号令により北条義時・同泰時・平賀朝政・畠山重忠・三浦義村・和田義盛・他多くの御家人が大挙して、比企ヶ谷の比企氏館を夜襲。一幡君を筆頭に一族は滅亡した。

翌日、翌々日も比企氏関係者を捕縛・処刑す。比企氏との縁戚である島津義久は大隅・薩摩・日向等の国の守護職を罷免された。

後に島津義久は上記三国の守護職を復活安堵されたのである。

頼家は將軍職を剥奪され、北条時政所有の伊豆修善寺に幽閉された。

**検証** 比企氏は何も落ち度もない。頼家の子・一幡は政子にとって孫であり、時政にとってはひ孫である、非人道的な北条氏の面をみた。鎌倉幕府の筆頭御家人の座を奪う為の政変に滅亡させられた事変が「比企氏の乱」であったのだ。

**重大な事実が他の文献で判明** 藤原定家の『明月記』に9月7日の条に記述あり。

「(前略) 左衛門督頼家卿薨じ、遺跡の郎従権を争ふ。其の子外租、遠江国司時政の為に討たれ、其の所従等を京の家々に於いて追捕摩滅すと云々。金吾(頼家)の弟童(実朝)家を継ぐべき由」。鎌倉幕府から京都後鳥羽上皇にへの上奏文であるが、当時の飛脚では京都まで、5～6日かかり、鎌倉を発ったのは9月1日か2日と想定される。

この奏上文では頼家は死去したためとあるが、死んではない。

時政は既にこの時、頼家・一幡。能員の殺害を予定していたことになるのである。

## 2. 北条氏

### (1) 北条氏とは

北条時政は桓武平氏の流れと称するが、父は北条時方（時家とする系図もある）。

母は伊豆為房の女。代々、伊豆の在庁官人であり土豪との説もある。時政の前半生は不明な点が多い。

平治の乱の翌年、伊豆蛭ヶ小島に流されてきた源頼朝の監視役を、伊豆伊東荘の在地領主伊東祐親と共に命ぜられたとする。

時政は娘政子が頼朝と結婚するに及び、源氏旗揚げに同意し、勢威を奮い、前述の通り、頼家の乳母の比企一族を滅ぼし、執権として御家人筆頭の地位を確保した。

二代将軍頼家を退位させ、実朝を後継にしたものの、元久2年（1205）後妻の牧の方と共謀し、実朝を排し時政の女婿・平賀朝雅を将軍に立てる“牧の方事件”により、追放された。

### (2) 北条氏が行った『源家壊滅作戦』（この「源家壊滅……」や「御家人一掃作戦」は当方の造語です）。

北条氏は鎌倉幕府草創期より、権力維持のため、源氏を根絶やしに努めた。

#### ① 源頼朝

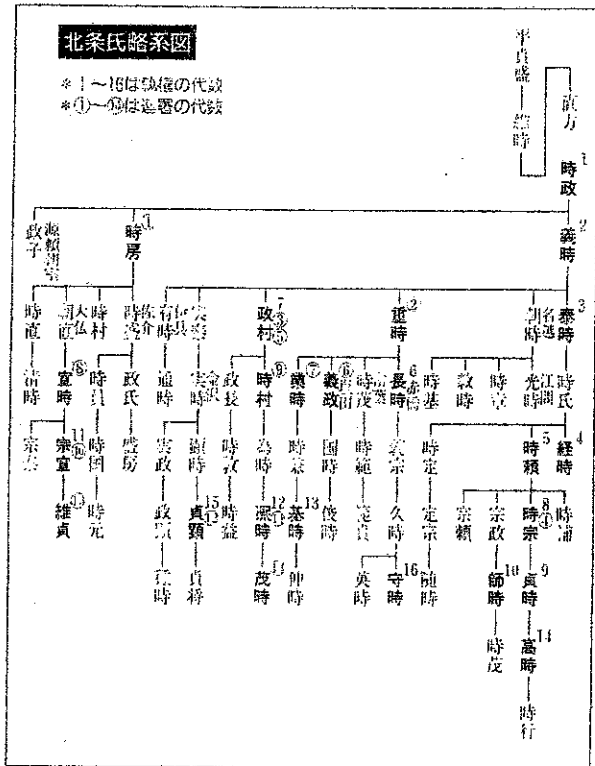
**検証** 『曾我物語』で有名になった、建久4年（1193）、源頼朝が行った富士野で巻狩を行った際、親の仇討として工藤祐経を討った曾我十郎・五郎の兄弟ことを称える内容であるが、五郎はその際に、頼朝の寝所を襲っている。

この兄弟は北条時政に烏帽子親として元服しており、美談としているが、実際は北条氏により「頼朝暗殺」が目的ではなかったのか…？。

**検証** 頼朝の死去したのは、正治元年（1199）正月13日に53歳であるが、その月と、その以前3年間の『吾妻鏡』が欠落している。

長女の大姫を後鳥羽天皇に入内しようとしていたが、病気で没してしまい、次女の三幡についても入内を画策しており、女御の称号を与えられ、正式の入内を待つばかりとなっていた矢先に頼朝は没した（その五カ月後に三幡も十四歳で没した。十四歳であった）。

前年、稲毛重成が亡妻（政子の妹）の追福のため相模川に橋を造り、そ





も、知れない。

『吾妻鏡』には、上記事件の翌月8日、「大倉薬師堂（現在の覚園寺）に詣でて、実朝拝賀式の際に、夢のごとくにして白き犬御傍に見ゆるの後、御心神違乱するの間、御劔を仲章朝臣に譲り退出しをはんぬ」と記され、初めて仲章が斬られたことも記している。上記薬師堂の戌神様のお蔭と云々とも追記している。

この2年後に起きた“承久の乱”（後鳥羽上皇の鎌倉幕府討伐、北条義時追討は、実際は中原仲章の仇討との説もあるのだ。

公卿は実朝暗殺の後、三浦義村邸に向かったが、義村は北条義時に連絡を取り、家臣によって公卿を討ち取ったのである。

#### ④ 静御前

生没年不詳。頼朝・義経の不和により、義経の都落ちの際、静もこれに従い、浜に至り船に乗るも漂没によって別離した。

文治元年（1185）、静は京都に戻るも頼朝の家臣に捕らえられ、翌年鎌倉に送られた。頼朝から義経の行方を厳しく尋問されたが、一切答えなかったという。

頼朝の妻・政子は静の舞を希望し、鶴岡八幡宮の回廊に召出し、頼朝と見物した。

「吉野山峰の白雪ふみ分けて入りにし人の跡ぞ恋しき」

「しづやしづしづのをだまききり返し昔を今になすよしもがな」

頼朝は静御前の義経に対する思慕を込めた舞踊に憤怒したが、妻政子は自分達のことを思えばと宥め、収めたと言う。

前述の静御前の舞った際には、源義経の子を宿していた。その4ヶ月後の閏7月29日、静は男子が誕生する。将来の幕府への影響を考え、家臣に命じて、その赤子を由比ガ浜に棄てたのである。その後の静御前の行方は不明です。

#### ⑤ 阿野全成（幼名は「今若丸」 頼朝の異母弟、義経の同母兄）

建仁3年（1203）6月23日、下野国で八田知家により誅殺さる。

全成の長男・頼全 翌月、京都延年寺にて誅殺さる。

全成の次男・時元 承久元年（1219）2月27日 挙兵するも敗死。

#### ⑥ 栄実（源頼家の次男）建保2年（1213）12月13日、和田氏の乱の後残党が栄実を大將軍となし反逆を企てたとして京都で襲われ自刃。

#### ⑦ 禅暁（源頼家の四男）承久2年4月15日、実朝暗殺の公卿に加担したとして誅殺される。

### 3. 御家人一掃作戦

源頼朝が死去した後、鎌倉幕府として長男の源頼家を二代将軍として継承した。ただし、若年であったこともあったが、次項で述べる様に、幕府の実権を握るべく、執権の立場を考えた北条時政・政子・義時は、他の御家人の筆頭の地位を確保すべき戦略を企てた。

各御家人を悉く滅ぼしていくのであった。

紙面の関係から詳細は渴愛しますが、概略を列記します。

- (1) 梶原一族・正治2年(1200)
- (2) 比企一族・建仁3年(1203)
- (3) 畠山一族・元久2年(1205)
- (4) 和田一族・建保元年(1213)
- (5) 三浦一族・宝治元年(1247)
- (6) 安達一族・弘安8年(1285)

### 4. 北条時政の末路は？…………

北条時政は後妻に牧の方を迎えた。

元久2年(1205)6月、牧の方は女嬖平賀朝雅の意を受けて時政に讒言し、畠山重忠・重保父子を討たせ、同年閏7月には、実朝を殺害し、朝雅を将軍にさせると画策したが失敗し、時政と牧の方は伊豆に追放された。

### 5. 北条義時の死因は？…………。

会報第82号に詳細を記述していますが、

北条義時は元文元年(1224)6月13日、61歳で死去した。

『吾妻鏡』には、「日頃は脚気で、霍乱(かくらん、現在の日射病)を併せた症状であるが、七転八倒の苦しみの中で、念仏を数十回唱えて亡くなった」とある。

しかし、その3年後の藤原定家の『明月記』には、承久の乱で、京方の首領の二位法印尊長が捕らえられ、「早く首を斬れ、そもなくば義時の妻が義時に飲ませた薬で俺を早く殺せ」と叫んだという。義時の妻とは後妻伊賀の方で、義時の死後、嫡子の泰時を退けて実子の政村を執権にしようと謀った女性である。

また、室町時代に書かれた『保暦間記(ほうりやくかんき)』には「義時ハ思イ外ニ、近ニ召仕エケル小侍ニツキ殺サレケル」とある。

鎌倉二代執権として権力を駆使し、絶大な権力を駆使した北条義時の最期は何故か、単なる病死ではなかったのでしょうか???

## 6. 来年のNHK大河『鎌倉殿の十三人』について

本件については、主人公が北条義時と聞き、耳を疑いました。  
よくもあんな極悪非道な人物を探り上げたと、驚天動地の心境であります。

本件については、別紙3. をご覧下さい。

— 完 —

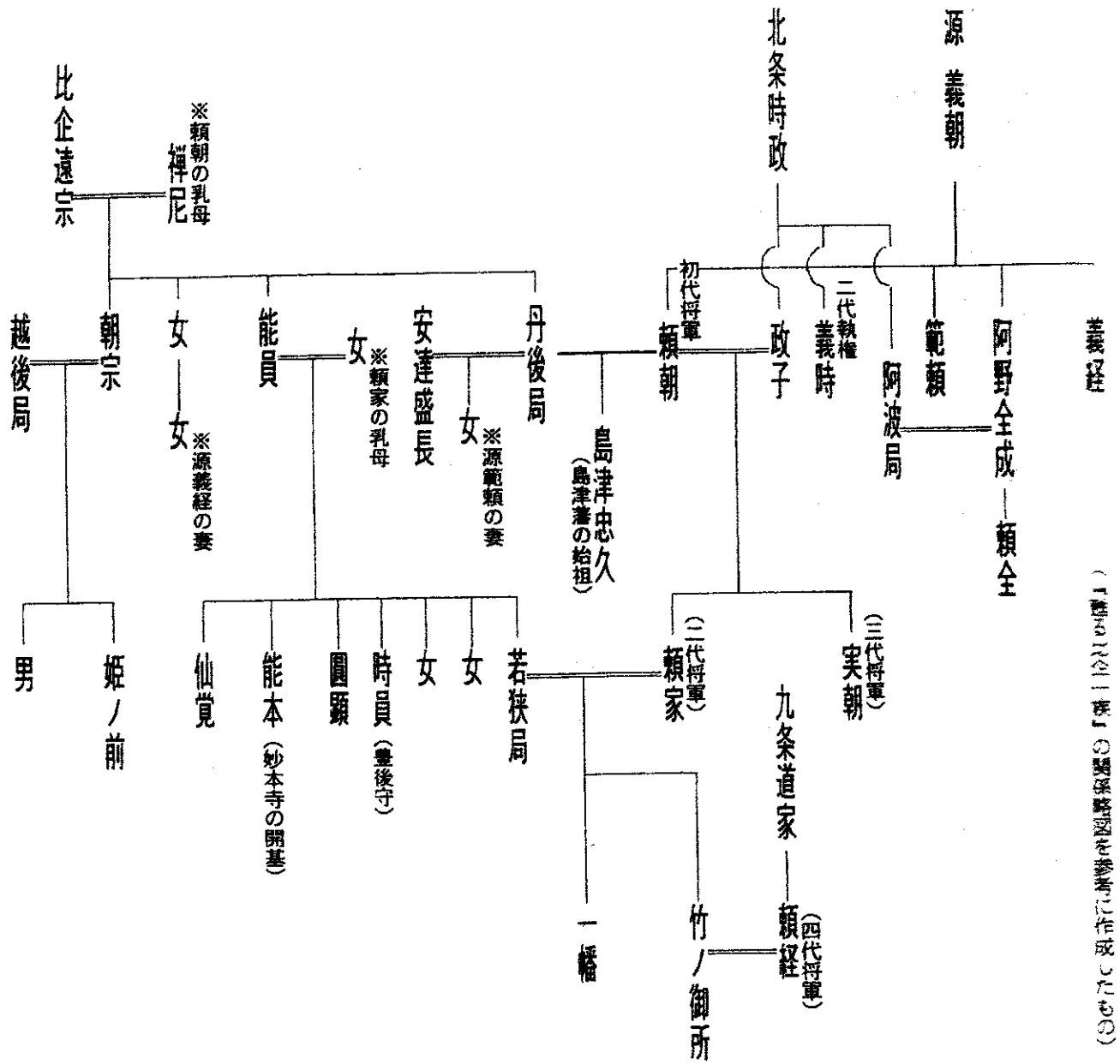
### [参考文献]

「全譯吾妻鏡」	貴志正造	新人物往来社
「甦る比企一族」	清水 清	比企一族顕彰会
「釜村北条氏の興亡」	奥富敬之	吉川弘文館
「陰謀の日本中世史」	呉座勇一	角川書店
「鎌倉興亡史・比企一族の乱」	加藤 蕙	秋田書店
「保暦間記」	佐伯真一	和泉書院
「鎌倉事典」	白井栄二	東京堂出版
「鎌倉・室町人名事典」	安田元久	新人物往来社
「裏方将軍 北条時政」	小野眞一	叢文社
「源氏一族のすべて」		新人物往来社



別紙 1.

比企氏及び源氏・北条氏の略系図



(「源氏」及び「源氏」の關係略図を參考として作成したものである)

## 別紙 2

### 比企氏関係の「丹後局の供養塔」について

#### 1. 丹後の局とは………？

比企遠宗と比企禪尼の長女で、比企氏に養子に入った比企能員とは義兄弟である。

当方が住む、横浜市戸塚区上矢部町に「丹後局の供養塔」があります。我家から徒歩で十二～三分の処です。

碑文には、「源頼朝の愛妾・丹後局の事蹟に起こりしものなり（中略）丹後局は頼朝の寵愛厚く、妊娠の身となり、夫人政子の嫉妬を被って、当地に至り。（中略）男子出生す安産の古蹟より丹後山と称せり（中略）。

局終焉のの地と思わるる処なり。（以後略）。

源頼朝が伊豆の蛭ヶ小島に流されて20年間、比企禪尼は物心両面で頼朝を支えたが、その長女も仕えていたようであり、遂に頼朝の子を出した。後の島津忠久です。

島津系図では治承3年（1179）とあります。

丹後局は忠久を生んだ後、伊豆で一緒に頼朝に仕えていた安達盛長に嫁した。

忠久はその後、惟宗広言の養子となり、本領の島津荘の地頭職のほか薩摩・大隅・日向の守護に補任される。



**検証** 当地の戸塚は、鎌倉と近いこともあり、北条政子から嫉妬から疎まれ、ここに来たことは考えられるが、丹後局は頼朝との間に島津忠久を出生した後、安達盛長に嫁いでいることを考慮すると、郷土誌には丹後局が居たとするものがあるが、終焉の地とするのは無理があるものと思慮する。

### 別紙3.

来年の大河ドラマは『鎌倉殿の十三人』である、

十二日 癸酉 諸訴訟の事、羽林直に決断せしめたまふの條、これを停止せしむべし。向後大少の事において、北條殿・同四郎主、ならびに兵庫頭廣元朝臣・大夫屬入道春信・掃部頭親能在京。三浦介義澄・八田右衛門尉知家・和田左衛門尉義盛・比企右衛門尉能員・藤九郎入道運西・足立左衛門尉遠元・梶原平三景時・民部大夫行政等、談合を加へ、計ひ成敗せしむべし。そのほかの輩は、左右なく訴訟の事を執り申すべからざるの旨、これを定めらると云々。

この題名の由来は左記の『吾妻鏡』に因るものだ。

鎌倉幕府初代将軍が死去して、3ヶ月経った建久十年（1199）四月十二日の条に、頼家の裁断を停止させ、北条時政以下の御家人等による合議裁決とする。

頼家は若干18歳であるが、頼朝時代の独裁を排し、建前は頼家を補佐するとの事だが、実際には執権職・北条一族の陰謀である。

この後、頼家、実朝を排し、梶原氏他御家人衆を悉く、排除していくのであった。

大河ドラマとは物語というものの、史実と相違するものでは、価値がない。

来年の大河ドラマについては、面白可笑しく描くのではないかと危惧しています。

『吾妻鏡』建久十年（1199）4月12日の条

#### ※大河ドラマ『鎌倉殿の十三人』の配役等

○脚本 三谷幸喜

○主な 配役

北条義時	・ 小栗 旬	比企能員	・ 佐藤二朗
北条時政	・ 坂東弥十郎	後白河法皇	・ 西田敏行
北条政子	・ 小池栄子	平清盛	・ 松平建
源頼朝	・ 大泉 洋	菅田将輝	
源義経	・ 菅田将輝		